

第74回日本PTA全国研究大会奈良大会に参加して

青森県PTA連合会 事務局長 木村洋志

「建国の地 大和からの発信 conviviality(自立共生)な「わ(和・輪・話)」

～挑戦するなら今しかない～」を大会スローガンに、日本PTA全国研究大会奈良大会が、8月21日(金)・22日(土)に天理大学杣之内第1体育館を主会場(全体会場)と奈良県内8会場(分科会場)で開催されました。県内からは、8名の会員の皆様が参加しました。子どもの未来のために、保護者・学校・地域・行政・企業が一つの「輪」となることが大切で、PTAはその橋渡し役の役割を担っている。子どもの未来を支えるためにはPTAは無くってはならない組織であることを再認識されたと思います。

私が参加した第3分科会は御所市を会場に【研究課題】ネット社会を生き抜くために、「禁止」よりも「共育」の視点を～子供の権利とネット社会の“環”を考える～と題して、約100名近くの参加者で開催されました。

基調講演1講師の今井善太郎さんや基調講演2の講師：堀家由妃代さんはネット社会の発展に伴い、子供は誹謗中傷や依存、さらには無自覚に加害者となるリスクに直面していて今こそ「子どもの権利条約」の精神に立ち返ることで、子供が主体的に判断できる力を養うべきであり、まずは大人が子供と共に学び育つ「共育」の姿勢を持ち、子供たちが安心してネット社会と関わっていける環境づくりを推進していくことを推奨されました。

そのあとのパネルディスカッションでも、スマートフォンやSNSが日常に深く浸透する今、大人が一方的に「禁止」するのではなく、子どもたちとネットの世界を「共有」し、共に考える姿勢の重要性をみなさん説いていました。改めてNSNとのかかわり方を深く考えさせられました。

また、2日目の全体会記念講演の「日本の心をつなぐ「和」の力」～建国の地・大和から未来へ～「わ」でつながる未来～家庭・学校・地域の共鳴～ということで講師は小名木善行氏(「倭塾」主宰)が日本の歴史と文化の本質を広く伝える活動に従事されている方です。

特に印象に残ったキーワードは、「和」と「関係性」、そして「観測点を動かす」ということでした。「トラブルのほとんどは関係性の問題」ということで確かに、物事そのものよりも、「自分はこう思う」「相手はこう思っている」という立場や見え方の違いから、すれ違いが生まれるということです。源氏物語やかぐや姫の話も、見る人や立場が変われば、見え方が違ってくる。人との関係も同じで、自分の目線だけではなく、相手の立場から見たらどうだろう？とか少し観測点を変えてみることで、これまで見えなかったことが見えてくるのかもしれない。そして、もう一つ印象に残ったのが、「出口設計」という言葉。物事を進

める時に、「最後はどうなっていたいのか?」「最後にはみんなが笑えるのか?」そんな“落としどころ”を最初から考えること。ただ問題を解決するだけでなく、これからも続いていく人との関係性を大切にしながら、みんなで良い未来をつくっていくというお話でした。

また、旧字体の「學校」の話をされ、子どもたちを先生だけに任せるのではなく、地域や保護者など、多くの大人たちが一緒になって一人前へと育てていくという意味があるということ話され、改めて「學」の持つ意味を認識することができました。

しかるに、「和」とは、ただ仲良くすることではなく、違う立場や考え方を持つ人たちが、お互いの関係性を考え、観測点を変えながら、一緒に未来をつくっていくことなのかと……。地域の歴史、そこに暮らす人たち、地域を知りうることで、人とつながり、子どもたちを地域みんなで育てていく。何かPTAの原点みたいなことを改めて考えさせられる講演でした。

第74回日本PTA全国研究大会奈良大会、35℃を超える暑い中での研修でしたが、得るものが沢山あった中身の濃い2日間でした。少しでも県P連活動に還元できればと思い、奈良の地を後にしました。それにしても奈良市内での鹿の目撃の多さ、天理大学の独特な建物の外観に圧倒されたことも付け加えます。